

2000年メキシコ連邦選挙の分析

渡 辺 暁

序*

2000年のメキシコ大統領選挙は、1929年以来政権を維持してきた制度革命党（Partido Revolucionario Institucional—以下PRI）の敗北という、歴史的な結果をもたらした。メキシコ政治の民主化を象徴するかのようこの選挙に勝利したのは、保守系野党、国民行動党（Partido Acción Nacional—以下PAN）と緑と環境の党（Partido Verde Ecologista de México—以下PVEM）によって構成された変革連合（Alianza por Cambio—以下AC）の、ビセンテ・フォックス＝ケサーダ（Vicente Fox Quesada）候補であった。フォックス候補は投票総数の42.5%を獲得し、36.1%を獲得したPRIのフランシスコ・ラバスティーダ＝オチョア（Francisco Labastida Ochoa）候補に、6.4ポイントの差をつけた。革新系野党、民主革命党（Partido de la Revolución Democrática—以下PRD）を主体としたメキシコ連合（Alianza por México—以下AM）のクアウテモック・カルデナス＝ソロルサノ（Cuauhtémoc Cárdenas Solórzano）候補は、16.6%を獲得した¹。

本稿の目的は、なぜフォックス候補はこの2000年選挙で勝つことができたのか、その要因を探ることである。2000年選挙で注目すべき点は、直前の世論調査の結果では接戦が予想されたにもかかわらず、フォックス候補が6.4ポイントのはっきりとした差をつけて勝利したということである²。2000年のアメリカ大統領選挙では、接戦と旧態依然とした投票システムが選挙後の混乱を招いたが、もしメキシコにおいて同様の混乱が起こったとしたら、選挙制度に非常に大きな負担がかかり、政権交代がスムーズに行われなかった可能性もある。従って、フォックス候補がはっきりとした差をつけて勝利

したという事実は、政権委譲をスムーズにした意味で今回の選挙の重要な点である。

2000年の選挙については、2001年8月までにいくつかの研究が出ている。オルテガは96年の政治改革に代表される選挙制度の改善が、2000年の選挙をより公正なものとし、政権交代の大きな要因となったとする³。シャークはフォックス候補の所属政党であるPANの、特に地方政治を通じた成長を指摘した上で、フォックス候補の選挙運動の特色について触れている⁴。ウォリスは、オルテガ同様制度の変化に目を配りながらも、「アメリカナイズ」され、またネガティブキャンペーンが目立つなど今回の選挙戦が特徴的なものであったことを、指摘している⁵。また、バナメックスの研究グループは、選挙結果ならびにレフォルマ紙他の行ったアンケート調査のデータを元に、2000年選挙の投票行動を分析している⁶。

日本国内では、PANの地方を基盤とした勢力拡大に加え、フォックス候補の個人的人気は勝利に大きく貢献したとする岸川の分析と、PRI政権への不満を持つ有権者が、PRIを打倒するための最善の選択としてフォックス候補に投票したとする、有権者の投票行動を重視した恒川の分析が、これまでに発表されている⁷。

本稿ではオルテガが重視する選挙制度の改善や、シャークの言うPANの成長などの構造的要因をふまえつつも、今回の選挙結果が従来とは大きく異なる点、具体的には大統領選と議会選における得票結果が大きく異なったことを重視する。大統領選挙ではフォックス候補が投票総数の42.5%を獲得したのに比べ、同時に行われた連邦議会選挙におけるACの得票率は、上下院ともに38%代にとどまった。下院選挙におけるACの得票率は38.3%で、フォックス候補の得票率(42.5%)より約4ポイントも低く、PRIの得票率(36.9%)より1.4ポイント高いだけであった。

この論文では、議会選挙でのACの得票と大統領選でフォックス候補の得票の差をクロスヴォートと呼び、分析の主たる対象とする。この差こそが、フォックス候補の6.4ポイントの十分な差をつけての勝利を考える上での重要な鍵になると思われるからである。本稿では、300の小選挙区別の選挙データを用いながら、これら地域別のクロスヴォートと選挙運動の特徴とを関連づけることを試みる。フォックス候補とACの議会選挙における得票の差については、ウォリス、そしてバナメックス・グループのアルボとバレーラがすでに指摘しているが、ウォリスは議会選挙での各党の強弱と大統領選挙

でのフォックス候補の得票との関連を、州あるいは選挙区別に分析までには至っていない。一方、アルボとバレーラも、32 の州毎の大統領選と議会選における得票の差に着目したものの、これと選挙運動の特徴とを十分に関連付けているとはいえない。また、二人の日本人研究者による論文もフォックス候補の高い得票率に注目しているが、岸川はフォックス候補の個人的人気、恒川は PRI 中心の政治の変革を求める投票行動を重視している点にそれぞれの特徴がある。

第 1 章では 2000 年選挙の背景となる、80 年代以降の選挙制度の変遷ならびに野党の成長にふれ、第 2 章では 80 年代以降の選挙結果を紹介した上で、2000 年選挙の結果を投票結果のずれに着目して分析する。第 3 章では、なぜ今回の選挙でこのようなずれ（クロスヴォート）が顕著に見られたのか、その要因を分析する。最後に結びでは、分析の結果をまとめるとともに今後のメキシコの民主主義制度について考える。

第 1 章 2000 年選挙の背景：政治制度と政党制の変容

本章では 2000 年選挙の背景として、政治制度と政党システムがどのように移り変わってきたのかを扱い、フォックス候補が所属する PAN が 80 年代から 90 年代を通じて組織として成長し、政権交代の下地を作ったことを見る。まず第 1 節では、PRI の長期政権維持に重要な役割を果たしたメキシコ独特の政治制度にふれ、第 2 節では、政治体制が 70 年代後半以降徐々に政治的自由化、ひいては民主化の方向に向かっていった様子を確認する。最後の第 3 節では、PAN を中心とした野党勢力の成長について触れる。

第 1 節 ヘゲモニー政党制

メキシコは他の多くの中南米諸国と異なり、20 世紀半ば以降軍事政権を経験していない。また大統領、国会議員等の公職選挙も 1930 年代以降定期的に行われてきた。しかし、1929 年の PRI の前身である国民革命党（Partido Nacional Revolucionario）の結党以降、80 年代まで選挙には実質的な競争はほとんど存在してこなかった。80 年代以前のメキシコでは、PRI が大統領はもちろんのこと、全ての州知事ポスト、例外を除くほとんど全ての上院議席、ならびに下院の大多数を押さえて、圧倒的な力を持って

いた。これは主として、PRI がメキシコ革命によって流動化した社会をまとめ上げる形で作られたため、多くの国民の参加を得られた一方で、革命の後継者としての政治的正統性を持っていたこと、そして輸入代替工業化を軸とした経済成長戦略が功を奏したことから、PRI が十分な支持を得られたことによる⁸。1938、46年の内部再編により、労働者、農民、中間層の各部門を傘下におさめたコーポラティズム型の統治機構を作り上げたことも、政権の安定に貢献した。有力な野党候補が登場した1946年と52年を除き、1976年までの大統領選挙では常に80%以上の得票率を維持した⁹。

一方で、メキシコ独特の政治制度もこうした政権の安定に寄与した要因の一つである。たとえば政治団体が選挙に参加するためには、政党として登録することが必要とされたが、これには厳しい条件が科された。こうして反対勢力の選挙政治への参加は限定された一方、体制に近い野党、あるいは従来の方 PAN のような穏健な政策を持つ、PRI にとって危険ではないと認められた党だけが、存続することができた。こうした点からメキシコの体制は、ダールのポリアーキーの図式で言えば、ある程度包括的ではあったものの、公的異議申し立ては大きく制限された包括的抑圧体制だったといえる¹⁰。

サルトーリは、一つの政党が圧倒的な力を持ち、政党間の競争がほとんどない一方で、野党が存在して一党独裁でもないこのようなメキシコの政党制度を、ヘゲモニー政党制と分類した¹¹。PRI は選挙において圧倒的な勝利を収め、実質的な全ての政治権力を握る一方、1963年に導入された政党議員制などによって小政党を存続させ、一党独裁への傾斜を防いだ¹²。こうした制度そのものの特徴に加えて、政治体制の非民主的な性格は、制度の恣意的運用にもあらわれていた。たとえば1946年、1952年の選挙ではPRIの得票率が80%を切ったが、この時にPRIに次ぐ得票率をあげた政党は、PRIに対する危険性が高い勢力とみなされ次の大統領選挙の時までに登録を抹消された。一方で体制寄りとみなされた政党は、選挙で政党登録維持の最低基準とされる得票率をあげなくても、政党登録を維持することができた¹³。しかし次節で見るように、この政治体制は70年代以降少しずつ姿を変えていくことになる。

第2節 政治的自由化と民主化

PRI を中心としたメキシコ独自の政治体制は、20世紀中盤を通じて安定を維持して

きた。とはいえ政府に対する反発がなかったわけではない。特に時代が下るにつれ、参加のチャンネルを限定する政治的な抑圧、経済的不平等に代表されるような革命の理想と乖離した現状への不満から、PRI 政権に対する反発は高まっていった。68 年の学生運動などはそのよい例である。政府はこうした不満を、新たな政党の選挙への参加を比較的容易にするなどの政治面での譲歩で解消しようとした¹⁴。具体的には政治的自由化をうたった 70 年代前半のエチェベリア政権による「開放(apertura)」政策、そして政府に批判的な政治勢力の政党政治への参加条件をゆるめた、77 年の政治改革などがあげられる。この結果 79 年の選挙では、いくつかの新しい政党が登録を得て選挙に出た¹⁵。

82 年の債務危機に始まる経済の停滞は政府に対する不満を増大させた。野党を通じた政治参加は、部分的な政治的自由化とあいまってこうした不満のはけ口の一つとなり、選挙における競争は以前より激しくなった。しかし一方で、PRI には権力を手放す意図はなく、86 年のチワワ州知事選挙など、多くでは野党の勝利を阻止するために大規模な選挙不正が行われたと言われる。また選挙制度の面でも、87 年に PRI の議会過半数維持を確実にする為の変更が加えられるなど、様々な政権維持のための方策が見られた。

さらに 1988 年の大統領選挙に先立って、現職のミゲル・デラマドリ大統領に続き、同じ経済官僚出身のカルロス・サリナス計画相が大統領候補に選出されたことで PRI 党内から反発が起き、PRI の歴代大統領中、大規模な農地改革など、最も人民主義的な政策をとったことで知られるラサロ・カルデナスの息子、クアウテモック・カルデナスを中心として、民主傾向 (Corriente Democrática) というグループが結成された¹⁶。このグループは当初、党の意思決定手続の民主化など、党内刷新を求めて活動したが、最終的には PRI に反旗をひるがえすことになった。カルデナスはそれまでの大統領選挙では一貫して PRI の候補を支持してきた体制寄りの政党、真正メキシコ革命党 (Partido Auténtico de la Revolución Mexicana : 以下 PARM) から大統領選挙に出馬し、他の小政党と連合して、国民民主戦線 (Frente Democrático Nacional : 以下 FDN) を結成した。この連合には左派のメキシコ社会党も参加し、PRI 史上最大の野党勢力となった。この選挙では多くの選挙不正が告発された他、選挙管理委員会の集計作業の逐次発表が途中で中断されるなどの不測の出来事が相次ぐ疑惑選挙となった。

こうした過程を経て大統領となったサリナスは、自らの正統性を再確認するためにも、

選挙制度の改良を政権の課題とした。彼は主なもので3回にわたって選挙法改正を行い、それまで行政府の管轄であった選挙管理委員会（Instituto Federal Electoral：IFE）を、独立組織として設置する（但し、選管の委員長は引き続き内相が兼務した）などの、選挙制度への信頼を高めるための様々な措置をとった。一方で、88年選挙で政権を脅かした強力な野党連合の再来を防ぐべく、複数政党による共通候補の擁立を厳しく制限するなど、PRI政権の安定も同時に図られた。94年の選挙はこの制度のもとで行われ、一見好調を維持していた経済の影響もあり、PRIが大統領選、議会選ともに、80年代以前ほど圧倒的ではなかったものの、十分な差をつけて勝利した。

94年12月、セディーヨ大統領の就任直後に経済危機がおき、サリナス前大統領が亡命するなどの政治スキャンダルが持ち上がると、PRI政権に対する不満は再び高まった。宥和策の一環として、更なる政治改革が求められ、その一環として96年に選挙法が現行のものに改められた。与党PRIだけではなくPAN、PRDの主要野党が立法過程に参加したこと自体この選挙法の新しい点であったが、制度的に見てもっとも大きな特徴は、選挙管理委員会の運営を市民の中から選ばれた評議員に全面的に委嘱し、行政府と政党の決定権を排除したことである¹⁷。この選挙管理委員会の再編によって、選管に対する信頼性が高まったほか、有権者の登録から投票、集計までの過程で不正を防ぐための様々な措置が講じられた。また、選挙結果の承認を行う選挙法廷が最高裁判所内におかれることになり、行政府ならびに立法府の影響が断ち切られることになった¹⁸。政党間の競争の条件を公平なものに近づけようとした点も、この選挙法の評価されるべき点である。具体的には政治資金ならびに宣伝広告へのより公平なアクセスが定められた。この選挙法では政府の交付する政党助成金が大幅に増えた他、その分配方法もかわり、以前ほどの政党間の格差はなくなった¹⁹。一方で民間からの政治献金に関しては、各政党は公的助成金の10%までしか現金の形での献金を受け取ることができないなどの制限が課せられた²⁰。PRIが初めて下院で過半数割れをした97年中間選挙と2000年連邦選挙は、この制度の定めるルールに則って行われた²¹。

以上みてきたように、メキシコにおいては70年代後半から96年にかけて、公正な選挙を保証するための制度作りが、非常にゆっくりとした速度ではあるが進んできた²²。この民主的で公正な選挙制度は、政権交代を可能にした構造的な要因の一つといえる。

第3節 野党勢力の成長

第1節で触れたように、70年代以前のメキシコの野党は、圧倒的な力を持つ与党PRIに対する反対勢力としての役割を果たしては来なかった。しかし80年代以降は徐々にこの状況が変化する。これには左翼政党の政治参加の拡大と、穏健な保守主義で知られていたPANの姿勢の変化が影響している。

77年の選挙制度改革によって左翼政党の選挙政治参加が本格化した。この直後に政党として登録し、79年の選挙に参加した共産党は、2度の改称を経てメキシコ社会党（Partido Mexicano Socialista）となった。88年の大統領選挙後、社会党はFDNの主要勢力を受け入れ、PRDへと再編された。PRDはサリナス大統領時代には苦戦したが、97年の連邦選挙では、連邦区知事（メキシコ市長）選でカルデナスが勝つなどの巻き返しを見せた。2001年8月現在、連邦区を初めとする4つの州の知事を出しているほか（連立を含めれば7州）、大統領選挙でも94年と2000年の2回、17%前後の得票率を記録し、第3の政党としての地位を確立している。

PANは1939年に結成された歴史のある野党である。ゴメス=モリンらの知的職業人たちが中心となって近代化を目指すために作られたこの党には、当時のカルデナス大統領の人民主義的政策に反発する企業家層や、カトリック教会に近い活動家が加わった²³。当初は、PARMや人民社会党（Partido Popular Socialista）といったPRIに非常に近い衛星野党とは一線を画しつつも、政治権力を追求するというより「市民としての自覚」を育てることを強調していたため、選挙をそれほど重視してはいなかった²⁴。

PANが本格的に選挙に力を入れるようになったのは70年代からである。この方向転換は当初指導部内の内紛を招いたが、80年代以降は積極的に選挙に参加する方針が定着した²⁵。PANの研究で知られるロアエサは、同党にとって特に大きな転機となったのが、82年の銀行国有化であったと指摘している。それ以前には、経済面での重要な決定の前には政府と企業家層の間に常に話し合いがもたれ、両者の間には非公式な形ではあったものの協調関係があった。しかし82年の危機の際には政府が一方的にこの銀行国有化の措置を断行したため、企業家層が政府に対する不信感を募らせた。こうして政府の政策に不満をもつようになった一部の企業家達が、政党政治の世界に乗り出そうとしたとき、PANは最も自然な選択肢であった。彼ら企業家たちの参加により、PAN

は人的経済的資源を得て勢力を強めた²⁶。

82年の経済危機以降、政府に対する社会全体の反発という追い風もあり、80年代を通じてPANは勢力を伸ばした。特に選挙不正が横行した86年のチワワ州知事選では、PRI勝利の結果を不服とするPANの支持者を中心とした大規模な抗議運動が起きた。88年の大統領選挙ではカルデナス候補率いるFDNの躍進の影に隠れはしたが、上院選挙では20%近い得票率を得た。89年にはPRI体制初めての野党からの州知事を北部、バハカリフォルニア州で誕生させた。2001年8月現在、他政党との連合で擁立した候補も含めて、10の州でPAN所属あるいは公認の州知事が政権についている。連邦選挙でも94年以降は常に20%以上の得票率を取めるようになった。

以上で述べてきたような、90年代以降本格化した選挙制度の改善と、80年代以降のPANの政党としての成長によって、2000年大統領選挙においては政権をめぐる政党間の競争が可能になったと言えるだろう。続く第2、3章では、こうした状況を踏まえて2000年選挙の結果を分析し、フォックス候補の勝利の要因を説明することを試みる。

第2章 2000年連邦選挙の分析：クロスヴォートの増加とその要因

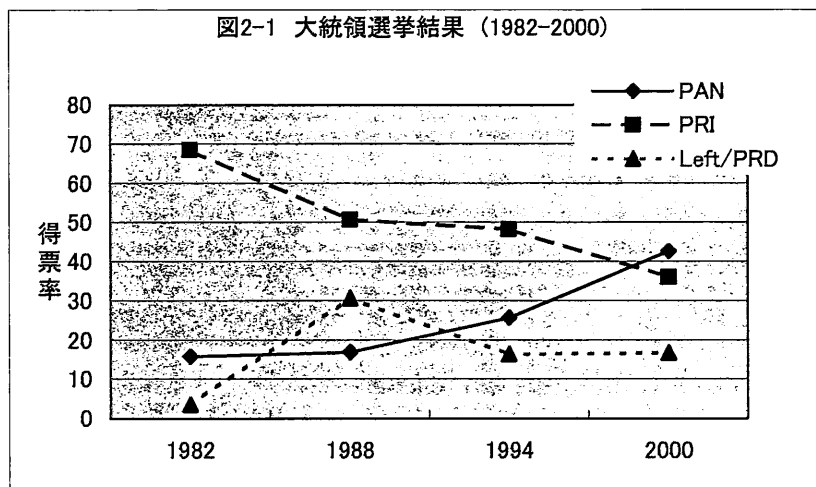
本章では2000年選挙結果の分析に入る。序で触れたように、選挙直後に発表されたアルボとバレーラによる選挙結果分析の中で、フォックス候補の得票が議会選でのACの得票よりも150万票多いことが指摘されているが²⁷、本章ではフォックス候補の得票とACの議会選挙の得票のずれを、州別・選挙区別の選挙結果に基づきより詳しく検討する。

第1節 80年代以降の連邦選挙結果

PRIの政権が安定していた1960年代以降、1976年までのメキシコの大統領選挙はPRIが常に80%以上の得票率で圧勝してきた。特にPANが大統領候補擁立を見送った1976年の選挙は、実質的にPRI候補の信任投票となった。しかし、こうしたPRIの圧倒的な強さは経済危機の影響もあって82年には既に弱まり、PRIの前身である国民革命党（Partido Nacional Revolucionario）が結成されて以来はじめて、得票率は70%

を切った。

図 2-1 は 82 年以降の大統領選挙の得票率の推移である。88 年には得票率は 50% 前後までおちこみ、94 年はほぼそれに等しいレベルを維持したものの、はじめての敗北を喫した 2000 年には、36% にまで低下していることがわかる。対する野党の側では、左翼政党は 82 年にはわずかな得票しか上げられなかったが、88 年に FDN 効果でかなりの伸びを示し、その後 PRD となった 94 年と 2000 年にはともに 17% 前後の得票率を得ている。PAN の得票率は 82 年にはじめて 15% をこえ、その後順調に得票率を伸ばし、2000 年の大統領選勝利に至っている。

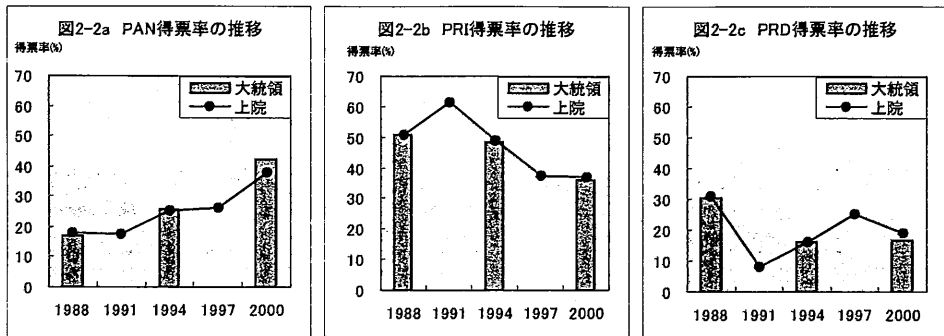


出所： 1982-1994： Silvia Gómez Tagle, *La transición inconclusa*, México: El Colegio de México, 1997 付属データ、2000： IFE ホームページ(www.ife.org.mx)。

82 年、88 年、94 年の Left/PRD はそれぞれ、左翼政党の合計、FDN、PRD の得票率を、2000 年の PAN、Left/PRD はそれぞれ、AC、AM を表す。

88 年以降の大統領選挙結果に、三年ごとに行われる上院議員選挙の結果を重ね合わせ、政党ごとに図示したのが図 2-2 (a,b,c) である。これを見ると 91 年にいったん PRI は 60% まで支持を取り戻した後、94 年に 50%、97 年には 37% と得票率を下げていることがわかる。97 年と 2000 年の落ち込みは 1 ポイント程度であり、PRI の低落傾向は、97 年の時点で既に現れていることがわかる。PRD は 97 年の中間選挙で高い得票

を得たが、2000年には再び94年のレベルにまで落ち込んでいる。



出所： 1982-1994： Silvia Gómez Tagle, *op. cit.* 付属データ、
1997-2000： IFE ホームページ(www.ife.org.mx)。

88年のPRDはFDN、2000年のPAN、PRDはそれぞれ、AC、AMを表す。

もう一つ興味深いデータは、94年には各党の大統領選挙と上院議員選挙の結果がほとんど変わらないのに対して、2000年の場合両者の結果が大きくずれていることである。2000年のメキシコ連合の大統領選と上院選の得票率の差は2.2ポイント、変革連合にいたっては4.4ポイントの差がある。このクロスヴォート現象について、次節以降で詳しく扱う。

第2節 クロスヴォートの絶対量の変化

序章ならびに第1節で触れたように、フォックス候補が投票総数の42.5%を獲得したのに対し、変革連合の上下両院選挙での得票率はいずれも38%台であった。この格差をより詳しく調べるために、以下ではいくつかの指標を導入する。

まず、クロスヴォートの絶対量を94年選挙と比較するため、以下のような計算を試みる。州*i*における主要三勢力²⁸の大統領選挙と上院議員選挙における得票数の差をそれぞれ D_{PANi} 、 D_{PRIi} 、 D_{PRDi} 、各州の大統領選挙における投票総数を T_i とし、州*i*におけるクロスヴォート量の指標を CVI_i を

$$CVI_i = \frac{\sqrt{(D_{PANi})^2 + (D_{PRIi})^2 + (D_{PRDi})^2}}{T_i}$$

と定義する。さらに、この CVI_i をすべての州に足し合わせたものを NCV とする²⁹。

この指標はクロスヴォートの絶対量を示す目安となるが、1994年と2000年の二回の選挙について、 NCV の値を計算すると、それぞれ 0.81、2.08 となり、指標の値が 2.5 倍近くに増えていることがわかる。この 2 つの選挙における NCV の値の違いを見ても、クロスヴォートが 2000 年選挙に顕著にみられた現象であったことがわかる。

第 3 節 州別・選挙区別のクロスヴォート

第 2 節において、クロスヴォートが 2000 年の選挙に特徴的な現象であることを確認したが、ここではクロスヴォートの地域別の状況を見ていく。州 i におけるフォックス候補の得票数を $FOXS_i$ 、変革連合の上院議員候補の得票数を ACS_i とし、その州におけるクロスヴォート比 $CVRS_i$ を、

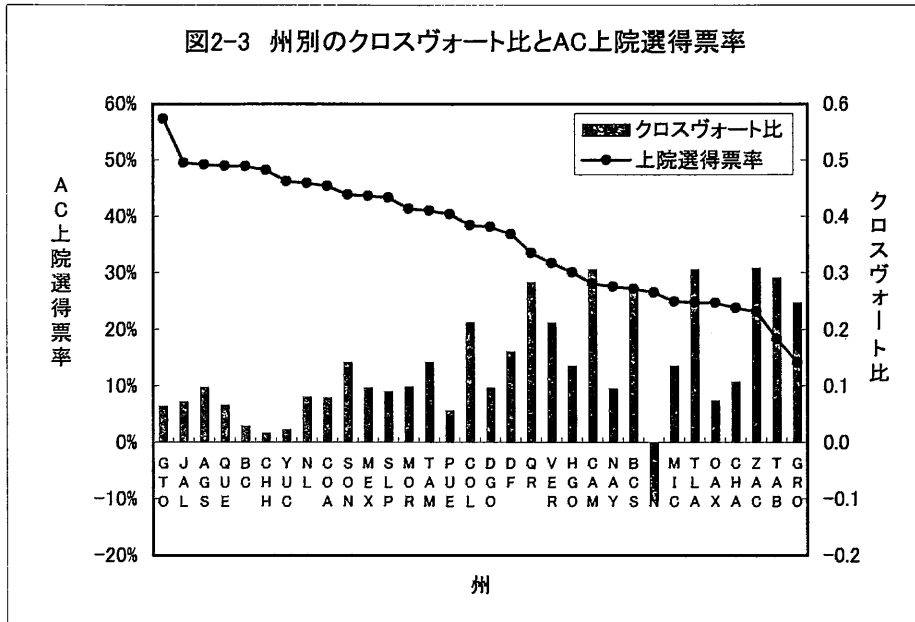
$$CVRS_i = \frac{FOXS_i - ACS_i}{FOXS_i} = 1 - \frac{ACS_i}{FOXS_i}$$

と定義する。この値はフォックス候補の得票の内、AC の得票に上積みした部分の割合を示す。各州についてこの値を計算し、変革連合の上院議員選挙の得票率とあわせて（上院選の得票率順に）図示したのが図 2-3 である。

これをみると、変革連合の弱い州でより多くのクロスヴォート現象が見られることがわかる。PAN の強いグアナフアト（図では GTO）、バハカリフォルニア（BC）、チワワ（CHH）、ユカタン（YUC）の各州では、クロスヴォート比は小さいのに対して、図の右側ではかなり大きな値をとる州がいくつもある。また、シナロア州（SIN）では唯一負の値をとっているが、これは同州がラバスティーダ候補の出身地であることに由来する。

特に目立つのは、州知事が PRD に所属している南バハカリフォルニア（BCS）、トラスカラ（TLA）、サカテカス（ZAC）の三州である。このうち、98 年に行われたトラスカラ州の州知事選挙では PRD、PT、PVEM、の三党の連合候補が 45% の得票率で PRI の候補（同 43%）に勝利した。このときの PAN 候補の得票率はわずかに 8% であったのに対して、2000 年の AC の上院選挙での得票率は 25%、さらにフォックス候補は得票率 35% を挙げた。同じ 2000 年の上院選挙で PRD 候補は 32%、カルデナス候補

は24%しか獲得しておらず、PVEMがPANと組んで連立の構成が変わったことを考えても、大きく得票率を減らしている³⁰。この例からもわかるように、PRDの州知事を持つ州では、同党の支持者の他、反PRIの浮動票も多く、2000年の選挙ではこれらの票が最も有望な野党候補であるフォックス候補に流れたと考えることができる。



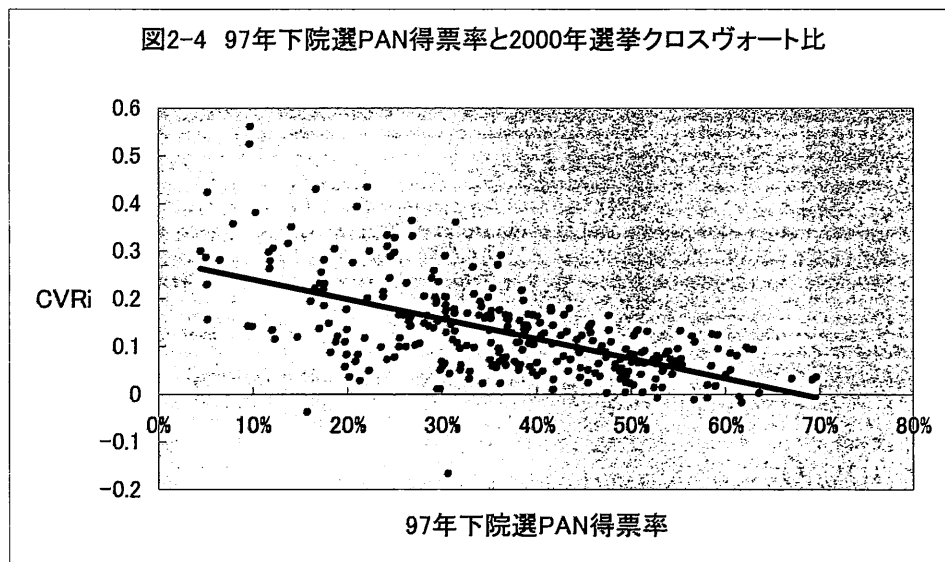
出所：IFE ホームページ (www.ife.org.mx)
2000年選挙州別データより筆者作成

こうしたクロスヴォート比について、さらに細かく地域別の傾向を調べるため、先ほどと同じ計算を、各小選挙区におけるフォックス候補の得票とACの下院議員選挙の得票について行う。選挙区 i におけるフォックス候補の得票数を $FOXDi$ 、変革連合の下院議員候補の得票数を $ACDi$ とする³¹。まず全国の各選挙区について、 $FOXDi$ と $ACDi$ の差を計算すると、フォックス候補の得票が変革連合下院議員候補の得票を下回ったのは、全国に300ある選挙区のうち8箇所しかない。しかもそのうち3つの選挙区は、PRIのラバスティーダ候補の地元、シナロア州に集中している。このことから、フォックス候補は全国的にほとんどの選挙区で、所属政党であるPANよりも多くの票を獲得

したことがわかる。

さらに州についてと同様、その選挙区におけるクロスヴォート比 $CVRD_i$ を $CVRS_i$ と同様に定義する³²。ここで 97 年の下院選挙の得票率を、2000 年選挙前の PAN の勢力を反映する指標と考え、各選挙区 i における CVR_i との相関を考える。300 の選挙区全てについて相関係数を計算すると -0.51 となり、高い負の相関を示す。しかも、例外的にクロスヴォート比の低いシナロア州第二選挙区（ロス・モチス：この選挙区でのフォックス候補の得票数は変革連合下院議員候補のほぼ半分であった）を除いて計算すると、相関係数は -0.56 となり、さらにはっきりした負の相関が出る。

図 2-4 は、座標平面上にロス・モチス選挙区を除く各選挙区の結果を図示し、回帰直線を加えたものである³³。この分析結果から、PAN の勢力がもともと弱い選挙区においてこそ、クロスヴォート現象が顕著に見られることがわかる。



出所：IFE ホームページ（www.ife.org.mx）

1997、2000 年選挙の選挙区別データより筆者作成

以上の分析から、2000 年選挙では 94 年とは異なり、クロスヴォート現象が顕著に見られたこと、そしてこの現象は主としてもともと PAN の基盤の弱い州で起こっていることがわかった。言い換えれば、フォックス候補はクロスヴォートの恩恵を受け、自党

の基盤の弱い州における票の流失を抑えたことがわかる。次章では、このような現象をもたらした 2000 年選挙特有の要因を考察する。

第 3 章 クロスヴォート現象の要因

この章では、前章で扱ったクロスヴォート現象の説明を試みる。まず第 1 節でフォックス候補の個人的人気にふれた上で、第 2 節では、レフォルマ紙の出口調査の結果を参考に、2000 年選挙における有権者の投票行動をみていく。第 3 節では第 2 節でふれる 2000 年の投票行動と関連づけながら、フォックス候補の選挙戦略について述べる。

第 1 節 フォックス候補の個人的人気

この節では、クロスヴォート現象をもたらした要因の一つとして、フォックス候補の個人的人気について言及する。まず、フォックス候補の経歴を簡単に述べる。1942 年生まれのフォックス候補は、もともと企業家として実績を残したが、80 年代前半に明らかとなった PRI の経済政策失敗への反発から政治に関与するようになった³⁴。1987 年に PAN に入党し、1988 年には当時の PAN 大統領候補、マヌエル・クルティエルに推されて下院議員選挙に立候補し、当選した³⁵。91 年にはグアナフアト州知事選挙に立候補し落選したが、この選挙では不正が数多く報告され、PRD など他の野党もフォックスの勝利を支持した他、選挙後激しい抗議運動が起きた。その後 1995 年に再び知事選挙に立候補し、今度は当選した。州知事時代の実績については賛否両論があるが³⁶、州行政での実務経験を持っていることは注目すべき点であろう。

選挙戦において、フォックス候補の政治家としての資質はいかんとなく発揮された。4 月と 5 月の 2 度にわたって行われたテレビ討論では、フォックス候補は持ち前の巧みな話術とカリスマ性で視聴者の好感を得た。2 回目の討論の放送後にレフォルマ紙が行ったアンケート結果では、回答者の 48% がフォックス候補を勝者と評価した³⁷。その他、彼の長身や俗語を交えた話しぶりも人気を集めた。この個人としての人気は、クロスヴォート現象に影響を与えたと考えるのは、自然であろう。しかし、次節で見よう

に、こうした個人としての人気は、必ずしも有権者の投票行動に反映されなかった。

第2節 有権者の投票行動

この節では、大手新聞社レフォルマが行った選挙当日の出口調査の結果を中心に、2000年連邦選挙における有権者の投票行動について考察する。表3-1はレフォルマ紙の行った選挙当日の出口調査で、誰に投票するかを決めた一番の理由を聞いたものである。まず、政党を理由に挙げている回答者は全体の5%に過ぎず、しかもフォックス候補に投票したのはそのうちわずか8%であった。つまり、政党としてのPANへの支持からフォックス候補に投票した有権者は少なかったと言える。この結果はクロスヴォート現象と整合的であるが、意外な点は「候補者」を重視して投票したのが全体の9%と少なく、しかもそのうちの半分以上がラバスティーダ候補に投票していることである。この結果は、フォックス候補の個人的人気はクロスヴォートの要因となったとする第1節の議論とは相容れない。

表3-1 投票を決めた一番の理由 (単位：%)

| | 候補者別 | | | | | 全体に占める割合 | | | |
|---------|------|-----|-----|-----|--------|----------|------|-----|--------|
| | 全体 | FLO | VFQ | CCS | Others | FLO | VFQ | CCS | Others |
| 変革のため | 43 | 15 | 66 | 18 | 1 | 6.5 | 28.4 | 7.7 | 0.00 |
| 候補者自身 | 9 | 50 | 28 | 18 | 4 | 4.5 | 2.5 | 1.6 | 0.02 |
| 義務感から | 2 | 56 | 31 | 13 | 0 | 1.1 | 0.6 | 0.3 | 0.00 |
| 習慣から | 7 | 82 | 12 | 5 | 1 | 5.7 | 0.8 | 0.4 | 0.00 |
| 比較的悪くない | 4 | 40 | 37 | 20 | 3 | 1.6 | 1.5 | 0.8 | 0.00 |
| 政党 | 5 | 79 | 8 | 12 | 1 | 4.0 | 0.4 | 0.6 | 0.00 |
| 政策 | 22 | 42 | 37 | 17 | 4 | 9.2 | 8.1 | 3.7 | 0.15 |
| その他 | 6 | 43 | 34 | 22 | 2 | 2.6 | 2.0 | 1.3 | 0.00 |
| わからない | 2 | 55 | 27 | 14 | 3 | 1.1 | 0.5 | 0.3 | 0.00 |
| 合計 | 100 | 36 | 45 | 17 | 2 | 36 | 45 | 17 | 1 |

出所：Reforma, 3 de julio de 2000 のデータを筆者が一部加工したもの³⁸
 FLOはラバスティーダ候補、VFQはフォックス候補、CCSはカルデナス候補
 Othersは小政党から出馬したカマチョ、リンコン両候補の合計をそれぞれ表す

これに対して目に付くのが、「変革 (cambio) 志向」である。回答者の半分近い 43% が、投票を決めた一番の理由を「変革」としており、しかもそのうちの 66% がフォックス候補に投票している。フォックス候補の当選と、有権者の変革志向との密接な結びつきが見て取れる。選挙前のアンケートの結果は、選挙直前のフォックス候補の追い上げを伝えており、これらを参照した変革志向の有権者たちが、恒川が指摘するようにフォックス支持に回ったと解釈できる³⁹。

変革のため、と答えた回答者のうち、もう一つの有力な野党候補であるカルデナスに投票したのは 18%にとどまり、ラバスティーダ候補 (15%) とあまりかわらなかった。これには、カルデナスの大統領選への立候補が 88 年、94 年に続く 3 回目で、変革のイメージにつながらなかった上、99 年末から選挙直前までの世論調査での支持率が平均して 20%弱にとどまり⁴⁰、選挙に勝って政権交代をもたらすとの期待を有権者に与えられなかったことが影響していると考えられる。PRI の刷新を訴えたラバスティーダ候補も、変革志向の回答者の票のうち 15%を獲得したが、これは実際の選挙における彼の得票率 (36%) に比べてかなり低い。また、全体に占める割合は低いものの、「習慣」で投票を決めたと答えた回答者のうちの 80%以上が彼に投票していることから、変革よりも PRI による長期政権の継続性を代弁していたと考えるのが自然だろう。

このアンケート結果を単純に解釈すれば、フォックス候補の個人的人気よりも、変革を求める投票行動がクロスヴォートの方がより重要な要因であったと考えられるだろう。次の第 3 節では、こうした投票行動をうまく利用したフォックス陣営の選挙戦略に触れる。

第 3 節 フォックス候補の選挙戦略

第 1 節で述べた政治家としての個人的資質に加えて、フォックス候補は独特の選挙運動を行った。彼の選挙運動の特徴は、彼独自の選挙運動組織を作るなど PAN とは一線を画す運動を行ったこと、そして第 2 節で扱ったような、変革への流れを最もうまく利用したことである。

まず第一に、彼は 1999 年 10 月に公式の選挙運動期間が始まる前から、自らを大統領候補として売り込んだ。97 年の中間選挙の直後に 3 年後の大統領選挙に出馬する意向を表明し、知事としての職務の傍ら、「プレ・キャンペーン (pre-campaña)」活

動を開始した⁴¹。第二に彼は、PANの勢力がこれまで浸透していなかった農村地域で、「トラクター作戦」と名づけられた積極的な選挙運動を展開した。それまでPRIの地盤であった農村の、1100万票とも言われる有権者への働きかけによって、フォックス候補は以前にはPRIが圧勝していた選挙区でも差を縮めた⁴²。常にブーツをはいて行動するカウボーイ(ranchero)スタイルでの遊説も、農村では特に効果を発揮した。

三つ目の特徴は、PANとは別に「アミーゴ・デ・フォックス(Amigos de Fox—フォックス友の会)」と称する個人後援会を組織し、選挙運動を展開したことである。この組織は1998年2月には既に活動を開始しており、ジャーナリストのオルティスによれば、PANの党員が約36万人であるのに対して、99年の終わりには120万人、さらに2000年5月には480万人の会員を集めたという。「アミーゴ・デ・フォックス」や2番目の「トラクター作戦」を通じて、フォックス候補は従来のPANの基盤以外にも支持層を広げることに成功したと言えるだろう⁴³。この所属政党とは一線を画した、候補者個人の独自性を重視した選挙戦略が、今回の大統領選での勝利に貢献したと言える。

こうした戦略に加えて、フォックス候補の陣営はアンケートに現れる有権者の動向に敏感であった⁴⁴。第2節で、変革を主たる投票決定の理由とした有権者が4割以上に達したことを指摘したが、こうした有権者の動向もフォックス陣営は認識していたと考えられる。実際フォックス候補は、選挙戦の最終盤で政権交代のための投票を訴えたり⁴⁵、もう一人の野党候補、カルデナスに出馬取り下げを呼びかけたりした。その結果、多くの有権者がフォックス候補を変革のシンボルとしてとらえた上で彼に投票した、あるいは、フォックス候補が変革への流れを最もうまく利用した、と考えることができる。第2節で指摘した投票行動の重要性に加えて、そうした変革への期待をうまく利用したフォックス陣営の選挙運動にも注意を払うべきであろう。

結び

この論文では、2000年の大統領選挙における政権交代を可能にした要因として、まず第1章で96年にほぼ完了した民主的な選挙制度の整備と、80年代以降の野党の成長

といった構造的なものを扱った。その上で第2章、第3章では2000年選挙の特徴といえるクロスヴォート現象に注目し、有権者の変革志向の高まりと、PANの支持基盤以外からも多くの票を獲得したフォックス候補の選挙戦略について指摘した。2000年大統領選挙でのフォックス候補の勝利は、彼の個人的人気そのものによるというよりは、有権者の変革志向が強かったことに加え、それをうまく利用したフォックス陣営の選挙戦略が功を奏した結果といえるだろう。

この選挙がメキシコの政治史上重要な選挙であること、公正な競争がかなりの部分まで可能になったことは間違いないが、同時に選挙不正などの問題点が完全に払拭されたわけではない。また、正式の選挙運動期間が始まる前のいわゆるプレ・キャンペーンについては、政治資金等の規制がないなどの、新たな問題も明るみに出た。このような問題点に、政府や選挙管理委員会がどう取り組んでいくのかが、今後注目される。

注

- * この論文の完成にあたって Reynaldo Ortega、恒川恵市、久松佳彰、受田宏之の各氏、ならびに匿名の審査員の方々に貴重なご意見を頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。
- ¹ 大統領選挙と同時に行われた連邦議会選挙の各党の得票率は、それぞれ変革連合が上院 38.1%、下院 38.7%、PRI が上院 36.7%、下院 36.9%、メキシコ連合が上院 18.9%、下院 18.6%であった。
- ² 2000年6月16・17日に行われたレフォルマ紙の選挙直前のアンケートでは、フォックス、ラバスティーダ両主要候補の支持率は、それぞれ 39%、42%で、2.5%の誤差を考えるとほとんど差のない状況にあった (*Reforma*, 22 de junio de 2000)。
- ³ Reynaldo Y. Ortega Ortiz ed., *Caminos a la democracia*, México: El Colegio de México, 2001, pp.560-561.
- ⁴ David A. Shirk, "Vicente Fox and the rise of the PAN", *Journal of Democracy*, vol.11, No.4, 2000, pp.25-32., pp.27-28.
- ⁵ Darren Wallis, "The Mexican presidential and congressional elections of 2000 and democratic transition", in *Bulletin of Latin American Research*, Vol. 20, No. 3, 2001., pp. 304-323., p.305, pp.312-315.
- ⁶ Grupo Financiero Banamex-Accival, "Especial: Elecciones 2000" in *Examen de la situación económica de México: Estudios económicos y sociales*, vol. LXXVI, núm.895 (julio 2000), México: Grupo Financiero Banamex-Accival, pp.256-276.
- ⁷ 岸川毅「進むメキシコ政治の民主化と2000年大統領選挙」『ラテンアメリカレポート』vol.17,

- no.2, 2000, 13-20 頁; 恒川恵市「分析レポート 2000年メキシコ総選挙—PRI体制の崩壊とその後」『アジア研ワールドトレンド』65号、2001年、33-39頁。
- ⁸ 恒川恵市『企業と国家』東大出版会、1996年、231-2、239頁。
- ⁹ Vikram Chand, *Mexico's political awakening*, Notre Dame: University of Notre Dame Press, 2001, p.56, table 2.6.
- ¹⁰ ダール『ポリアーキー』三一書房、1981年、5-12頁。
- ¹¹ Giovanni Sartori, *Parties and party systems: a framework for analysis*, New York: Cambridge University Press, 1976, p.232.
- ¹² Juan Molinar H., *El tiempo de la legitimidad*, México: Cal y Arena, 1991, p.66.
- ¹³ *ibid.*, p.82, Cuadro 2.8.
- ¹⁴ 本稿では詳しく取り上げることはできないが、PRIがなぜ、結果的に自らの政権基盤の喪失につながった一連の政治改革を行ったのかは、非常に大きな問題である。現時点での筆者の見解は、PRIが表向きは民主主義を標榜する政党であり、常に自らの政権基盤を固めるための正統性を必要としていたこと、また政権が十分強力だったときには、多少の政治的譲歩は政権基盤にほとんど響かず、その影響は無視できるものであった一方、政権基盤が揺らぎ始めてからは、もはや政治的自由化に逆行するような措置は取れなかったため、結果的に改革が進み、民主的な政治制度に行き着いたというものである。
- ¹⁵ *ibid.*, p.96, p.102
- ¹⁶ 恒川恵市『従属の政治経済学メキシコ』東大出版会、1988年、207頁。
- ¹⁷ Ricardo Becerra, et al., *La reforma electoral de 1996: Una descripción general*, México: FCE, 1997, pp.31-37.
- ¹⁸ *ibid.*, pp.128-154.
- ¹⁹ Ortega Ortiz, *op.cit.*, p.569, Cuadro 3.
- ²⁰ こうした努力の一方で、大統領選挙の選挙運動資金の上限は4億9200万ペソ（2001年1月の為替レートで5150万ドル）に設定されており、公的資金の割合が未だに低いことを示唆している。IFE, “Regulaciones para fijar gastos de campaña y límites establecidos para las elecciones federales del año 2000”, www.ife.org.mx.
- ²¹ Becerra, et al., *op. cit.*, pp.112-113.
- ²² これらの改革によって、選挙の実施状況は改善され、選挙不正は減った。とはいえ、選挙不正が完全になくなったわけではない。詳しくは、Global Exchange and Alianza Cívica, “Mexican federal elections 2000: Electoral observation report”, www.globalexchange.org. 等を参照。
- ²³ Soledad Loaeza, *El Partido Acción Nacional: La larga marcha, 1939 - 1994*, México: FCE, 1999., p.164, 170.
- ²⁴ Chand, *op. cit.*, p.76.
- ²⁵ Soledad Loaeza, “El Partido Acción Nacional: De la oposición leal a la impaciencia electoral”, en Soledad Loaeza y Rafael Segovia (comp.), *La vida política mexicana en la crisis*, México: El Colegio de México, 1987, pp.77-105, pp.85-94.
- ²⁶ *ibid.*, p.97, 99, 100.
- ²⁷ Andrés Albo y Carlo Varela, *op.cit.*, p.256.

- ²⁸ PAN、PRI、PRD の三党。ただし、2000 年には PAN、PRD の両党は連立を結成。
- ²⁹ $NCV = \sum_j CVI_j$
- ³⁰ 98 年の州知事選挙で連立候補が獲得した票の内、PVEM に入った票は 1 万票で全体の 3% 分に過ぎず、この 2 年間の投票傾向の差を説明できない。
- ³¹ 大統領選挙と議会選挙の比較の際、州別データに関しては上院選挙、小選挙区別データに関しては下院選挙の結果とを比べたのは、それぞれの選挙における一つの選挙区の大きさに対応させるためである。
- ³² $CVRD_i = (FOXD_i - ACD_i)/FOXD_i = 1 - ACD_i/FOXD_i$
- ³³ $y = -0.4127x + 0.2815$, $R^2 = 0.3592$, x の係数と切片の t 値はそれぞれ、-11.5 および 30.84 であり、いずれも 1% レベルで有意である。
- ³⁴ Shirik, *op.cit.*, p.28.
- ³⁵ Francisco Ortiz Pinchetti et al., *El fenómeno Fox*, México: Planeta, 2001, pp.16-17.
- ³⁶ Ortiz Pinchetti et al., *op. cit.*, pp.45-49.
- ³⁷ *ibid*, p.184.
- ³⁸ たとえば、投票する候補者を決めた一番の要因は「変革のため」と答えた回答者は 43% で、そのうち 15% はラバスティーダ候補、66% はフォックス候補に入れた。「変革のためラバスティーダ候補に投票した」回答者は、全体の 6.5% を占める (3133 人の有権者を対象に、全国 150 箇所 の投票所で行った出口調査。誤差 $\pm 1.8\%$ 、有意水準 95%)。
- ³⁹ 恒川恵市「分析レポート 2000 年メキシコ総選挙—PRI 体制の崩壊とその後」、35 頁。Grupo Financiero Banamex-Accival, *op.cit.*, p.264, cuadro 5.
- ⁴⁰ Andrés Webster, “Encuestas: lo que nos dijeron”, en Grupo Financiero Banamex-Accival, *op.cit.*, pp.263-266, p.264.
- ⁴¹ *ibid.*, pp.32-33.
- ⁴² *ibid.*, pp.104-105., Wallis, *op. cit.*, p.316.
- ⁴³ Ortiz Pinchetti et al., *op.cit.*, pp.32-36, 169-171.
- ⁴⁴ *ibid.*, p.92.
- ⁴⁵ 岸川、前掲論文、17 頁

“Análisis de las elecciones federales del 2 de julio del 2000 en México”

Akira Watanabe

La victoria de Vicente Fox a través de la Alianza por el Cambio (coalición compuesta por los partidos Acción Nacional, PAN, y Verde Ecologista de México, PVEM) convirtió las elecciones presidenciales del año 2000 en un suceso histórico, ya que fue la primera derrota del PRI a lo largo de toda su historia de más de 70 años. El objetivo principal de este artículo es responder a la pregunta: ¿por qué Fox pudo ganar esta elección presidencial?

Para poder comprender este suceso es necesario tener presentes dos factores estructurales: primeramente, el desarrollo del PAN como un partido de la oposición con la posibilidad de sustituir al PRI en su papel de partido gobernante; en segundo lugar, el progreso del nuevo sistema electoral que garantiza las elecciones mucho más limpias en comparación con épocas anteriores, y con ello el aumento de la credibilidad en todo el sistema electoral.

En este artículo, además de los puntos ya señalados, el autor se enfoca en la diferencia (más de 4 puntos porcentuales) de los votos que Fox obtuvo en la elección presidencial y que la Alianza por el Cambio consiguiera en las elecciones para las Cámaras.

Con base en los resultados electorales se pone de manifiesto el hecho de que no todos los electores que votaron por Fox lo hicieron de la misma manera por la Alianza por el Cambio. Analizando este fenómeno de *votación diferenciada*, encontramos que en casi todo el país Fox obtuvo más votación que su partido,

destacándose más la *votación diferenciada* en la zona donde el PAN no había tenido fuerza anteriormente, lo cual sugiere que Fox limitó en lo posible los daños que hubiera podido suscitar esta debilidad partidista en ciertas regiones.

Entre los factores que explican este fenómeno, podría hablarse del impacto que provocó entre los votantes el carisma de Vicente Fox. Sin embargo, el resultado de una encuesta de salida contradice dicha consideración, y da un mayor peso al deseo de los votantes de un cambio político que finalmente lo favoreció. Así, la encuesta muestra que casi la mitad de los electores respondieron que ellos habían votado por el cambio, y dos tercios de los que votaron por el cambio votaron por Fox.

El candidato de Alianza por el Cambio se impuso con esta expectativa de los votantes, ya que la imagen del cambio estaba mucho más fortalecida en él que en el resto de los candidatos. Labastida, el candidato del PRI, representaba antes que nada un heredero del sistema, a pesar de su postura como un reformista; mientras Cárdenas, otro candidato importante de la oposición, tampoco poseía la imagen, puesto que ésta era ya su tercera candidatura y por los resultados de las encuestas que le dieron escasas probabilidades de éxito. Además de estos factores, hay que mencionar la estrategia electoral del equipo de Fox, el cual aprovechó eficientemente esta tendencia y armó al candidato con la imagen del cambio.